

※朗読する際は、自分なりの文章のリズムを意識して、自由に読点「、」を打ち直してください。

テキスト2

『僕の宇宙の旅』

それほど空が好きだったわけじゃない。毎晩、星空を見上げて、何かを想うなんてこともほとんどしなかった。けれどある日の夜、僕は偶然に目撃してしまった。

そのとき僕はベランダで夜風に当たっていた。すると、遥か上空から何かが真っ逆さまに落ちてきたのだ。ゴウゴウと音を立て、光を放ちながら。

流れ星？ もちろん僕は咄嗟にそう思った。珍しい、運がいいんだな、と微笑みもした。けれど、どうも変だ。あまりに近過ぎないだろうか。音まで聞こえるなんてちょっとおかしい。気付くと僕は家を飛び出していた。不思議に思いつつ、僕の足は落下点へ向けて駆けていた。

どンドンと速度を上げていく。ゴウゴウという音は更に大きくなり、光に照らされた通りが徐々に白く輝き出す。

びっくりした。彼女がいた。

光が降り注ぐ先には彼女の姿があったのだ。

「君も見ていたの？」と僕は言った。

彼女はゆっくりと視線を上げた。そして、白い空を見上げながら彼女は小さく頷いた。

「この光はなんだろう？ 流れ星？」

僕は訊ねる。でも、彼女は何も答えない。ただ、遠い遠い空を眺めていた。

「こんなのを見たのは初めてだ。僕はそれほど宇宙や星に興味があったわけじゃない。けれど、目の前でこんな光景を体験したら好きになるかもしれないな。宇宙へ行ってみたい、星と星の間を飛んでみたい、そんな気持ちになる」

彼女は何も答えなかった。僕はじっと彼女を見つめるしかなかった。

そこでふと気付いた。おかしい。これだけの光と音なのだ。なのに僕と彼女以外、その場には誰もいないのだ。もっと人が集まってきてもよさそうなものだ。この光が見えないはずがない。この轟音が聞こえないはずがない。

「見ていてくれたのね」突然、彼女がぼつりと呟いた。「来てくれたのね」

「——え？」

「これはわたしが呼んだ光。わたしが呼んだ音。あなたのために」

そう言って彼女はまた口を噤んだ。

「僕のために……？ 僕のために君が呼んだ？」

それほど空が好きだったわけじゃない。
でも、今は違う。
僕の想いは、彼女へと旅立っていく。

(了)